

特集

「サステイナブルスクール」



サステイナブルスクールへの参加を決めて

中村真理子
(サステイナブルスクール担当)

2016年、夏休みが終わろうとする時期の教師会で、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ユネスコスクールの事務局 ACCU：Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）が募集するESD重点校（サステイナブルスクール）に応募するかどうかが話し合われた。しかしESD重点校というのが、何を求められているものなのかよくわからなかった。加えて、文科省の委託事業と聞くとはいふかぶのは、たくさんの提出書類。現状でも仕事は多過ぎるほどなのに……教師会メンバーの多くが最初、応募には消極的だった。参加・不参加を決める話し合いは、夜中まで延々と続いた。

「持続可能な未来をつくる教育（ESD）」というのなら、シュタイナー学校で私たちが目指そうとしている教育は、まさにそのとおりだと思う。2015年に国連で採択された「持続可能な開発目標（SDGs（*注1））」の17項目どれをとってみても、私たちが無関心でいて良い内容はなく、「身近な課題について自分が出来ることを考え、行動していくという学びが地球規模の課題の解決につながっている」という理念も一致している。ただ、そこへ向かう方法に共通点を持てるのだろうか。目標をお題目のように掲げ、学校設定の決められた活動に生徒を参加させ、体裁を整えて報告書を作成する。そのような仕事が増えるのだとしたら……。参加したい気持ちはありながらも疑心暗鬼になる私を後押ししてくれたのは、サステイナブルスクール選考にあたっての審査基準だった。

審査基準を順に見ていくと『ビジョン』『継続性』『バランス』という項目に続いて『前に踏み出す』という項目がある。内容は、要約すると「学習と実践活動をつなげる」ことや「主体性」である。シュタイナー学校においても課題に感じていることで、私は興味を持ちつつ、次に続く項目を見ると『刷新性』。つまり「既存の枠にとらわれず、ダイナミックにESD活動を創り上げている。または創り上げようとしている」ということ。これなら私たちが参加する意味もあるかもしれないと思ってさらに読み進めると『協働』の次に『変容』とあり「……学校も常によき変化を求め柔軟である」「学校が社会を変容させる拠点であることを認識し、学校と社会の相互の学びを積極的に推進している」と内容が説明されている。ここまで来て私は、ぜひ参加すべきだと思った。他の教員たちからも賛成の声が上がり、その後、運営会議でも賛成していただいて（理事会は最初から積極的だった）、私たちは、ESD重点校形成事業に応募することを決めた。

そして、審査を経て2016年9月、サステイナブルスクールとなった。同時にユネスコ本部が推進する「気候変動プログラム」の選定10校にも文科省によって推薦された。

「シュタイナー学校が参加する意義」については、直感的だったサステイナブルスクールへの応募だが、研修として行われた2016年11月19日の国際ワークショップは、それを見つけていくき

かけとなった。イギリスのサステイナブルスクール先進校（公立）であるアシュレー校のリチャード・ダン校長によるお話は、シュタイナー学校が「サステイナブルスクールに参加することの意義」について示唆に富み、確信を与えてくれるものだった。

研修会には、国内外から約 60 名の教員が集まっていた。国内の教員は、私と箕面こどもの森学園の教員一名の他は皆、公立学校の先生方だった。

冒頭、ダン校長は、「アシュレー校では、生徒が授業や休み時間が始まる前に、1 分間の静かな時間を持つようにしています。」と切り出された。それを聞いた私は、ちょっとした衝撃を受けた。心の中で「シュタイナー学校みたいなことを言うなあ」とつぶやいた。校長は、「サステイナブルに必要なことは、体の中心からはじまることだから……」と続け、「大切なのは、子どもに恐怖を与えるのではなく、希望を与えることなのです。」と環境教育において大切にされる考え方を示した。

実際に 1 分間の静かな時間を持った後、ダン校長は「みなさんの学校と授業では、どのくらい『円』が活用されていますか？」と私たちに質問をした。公立学校の先生方からは「『円』ってどういうこと？」と言うざわめき。「『円』がどのように活用されているかグループごとにシェアしてください。」と投げかけられたが「『円』って言われてもなあ…」とどのグループでもあまり話し合いが進まない様子。だが私はその例をあげようと思えば、いくらでも挙げられる。シュタイナー学校では、1・2 年生の授業がライゲンなどの円で始まることから、5 年生の植物学、6 年生の鉱物学、7 年生の化学などで取り上げられる様々な循環、体育を含むリズム活動の様々、季節の廻りが大切にされていること、幾何学が円から始まること等々、挙げだしたらきりがなく『円』は活用されているからだ。

ワークショップは、アシュレー校がカリキュラムの中心に据えている「ハーモニーの 7 原則」に添って進んでいったが、その「原則 1」が「円（循環）の原則」だったのだ。「水、食、炭素、蜂…円はサステイナブルのシンボルです。円を意識して授業に取り入れてください。」と校長は締めくくった。

続く「原則 2」は、「教科をつなげる。相互依存の原則です。どのように教科をつなげることができるか、グループごとに話し合ってください。」シュタイナー学校のメインレッスンは、基本的に教科がつながった総合学習である。どのようにというよりも、そちらが基本だ。「人と自然の相互依存の関係を学ぶためにも、教科・領域をつなげ、つながりを意識した学習をしていくことは大切です。」考え方は共通だが、ダン校長の示してくれた授業実践例は面白く、新しい刺激も受けた。

続く「原則 3」は、「幾何学の原則」。参加者は、コンパスを使って円を 2 つ、3 つ…と増やしながらか、それで絵や美しい図形を描くことを求められた。多くの参加者にとっては、これがかなり難しいようだ。私は、自分がズルをしている気がしてきた。5 年生の植物学や 6 年生の幾何学のエポックを体験しているものだから、図形をユリやバラに発展させたり、円から作る 6 角形で蜂の巣を描いたり…周りの人は驚いて感心してくれるけれど、学校でやっているだけ。シュタイナー学校の先生ならだれでも描くだろう。ダン校長は、この項の締めくくりに、「美しいものは大切なのです」「美しいものに囲まれている時の方が気持ち良いという感覚を育てることが、持続可能性につながります」とおっしゃった。

そうして、続く原則も一つ一つ、シュタイナー教育で行っていることと重なっていた。そして、最後の「原則 7: 一体性の原則」ではついに、ダン校長は、「自分と世界は、一つ」「自分と世界と神様は、違うものではなく一つのものなのだ」とまで言われた。思わず、私は『シュタイナー学校の卒業生では! ?』と疑ったが、そうではなく、シュタイナー学校については、名前を聞いたことがある程度らしい。

私の感想を聞いた永田佳之先生（学校法人聖心女子大学文学部教育学科教授：ESD 重点校形成事業推進委員）は、「シュタイナー学校は、サステイナブルスクールの先進校なんですよ」と言ってくれた。

他の研修報告会で国内の先生だけが集まった時には、取り組む活動が、学校で決められたから行うだけのものになってしまっていて、生徒の内面の能動性をどうやって育てるかに悩む声が多く聞かれた。そんな事も考え合わせると、確かにシュタイナー学校は、ESDに昔から取り組んでいる学校といってもいいのかも知れない。授業の中に、学校運営の中に、大人たちの意識のなかにESDにつながる様々な要素が散りばめられている。しかし、私たちが改善しなければならないことも多々ある。環境保護の面だけでもいくつか思い浮かぶ。私たちが国内外の他の学校から学ぶことがたくさんある。

100周年を迎えようとしているシュタイナー教育は、大切にしているものを守りつつも、枠を越えて色々な繋がりや広がりを持つ必要があると思う。このESD重点校への参加は、その一つとして大切なものになるのではないだろうか。ESDをどのように進めていくかは、シュタイナー学校であれ、公立学校であれ簡単なことではない。それはまた、教育の現場だけでなく、ESD事業を推進しようとしているユネスコや文科省、ACCUでも同じであることが窺われる。簡単な答えはない。だが、困難はありながらも、「子どもを育てる」という「未来を育てる」仕事に携われる責任と喜びを忘れず、「私たちが考え、行おうとすることが善きものであることを祈りつつ」一步一步、進んで行きたい。

注1：SDGs 朝日新聞「Globe」(11月5日発行)より抜粋
環境や人権、開発、平和などこれまで国連が取り組んできた課題を合流させて作られた17の分野における「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)アジェンダ2030」のこと。

17の分野

- 1 貧困をなくそう
- 2 飢餓をゼロに
- 3 すべての人に健康と福祉を
- 4 質の高い教育をみんなに
- 5 ジェンダー平等を実現しよう
- 6 安全な水とトイレを世界中に
- 7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに
- 8 働きがいも経済成長も
- 9 産業と技術革新の基盤をつくろう
- 10 人や国の不平等をなくそう
- 11 住み続けられる街づくりを
- 12 つくる責任 つかう責任
- 13 気候変動に具体的な対策を
- 14 海の豊かさを守ろう
- 15 陸の豊かさを守ろう
- 16 平和と公正をすべての人々に
- 17 パートナリーシップで目標を達成しよう

「誰も置き去りにしない」ことを基本的理念に据えて、分野別に具体的な行動目標が掲げられているが、実際の方策、資金の確保などは、まだまだである。